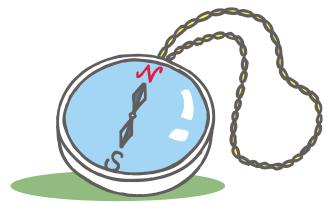


羅針盤



第37号

令和6年3月4日(月)

◆ 「利他の心」

私たちの心には「自分だけがよければいい」と考える利己の心と、「自分を犠牲にしても他の人を助けよう」とする利他の心があります。「利他」とは、「他人の利益となるように図ること。自分のことよりも他人の幸福を願うこと。自分を犠牲にして、他人のために尽くすこと。」であり、このような気持ちで周囲に接するありようを「利他の心」と呼びわけです。「利己の心」で物事を判断してしまうと、自分のことしか考えていないために、誰の協力も得ることができないことがあります。物事の捉え方の全てが自分中心ですから、視野も狭くなり、間違った判断をしてしまうこととなります。一方、「利他の心」で物事を判断すると、「人によかれ」という考え方を基とした心ですから、まわりの人みんなが自然と協力してくれることとなります。また、視野も広くなるので、常に正しい判断ができることがあります。より良い仕事をしていくためには、自分だけのことを考えて判断するのではなく、まわりの人のことを考え、思いやりに満ちた「利他の心」に立って判断をすべきであるということです。この教えを企業人として説いてきたのが、現在の京セラ株式会社やKDDI株式会社の創業者であり、日本航空の再建に尽力された稻盛和夫（いなもりかずお）です。もともと技術者であった彼は、会社を設立して社長となってから、どのように組織的な運用をすれば経営が成り立っていくのか随分と悩まれたそうです。新たな事業を始めるわけですから、儲けなければならないことは彼にも当然のことながらわかっていたことではありますが、だからといって儲けを優先することだけを会社の基準にしてしまっても従業員はついてこないのでないか、また、顧客や取引先も決して信用してくれないのでないだろうかと考え続けたそうです。結果として、彼は儲けることを大原則とはしましたが、「物事の善惡」を経営方針の基準に位置付けました。儲けることを目ざすとともに、人間としてやっていいことと悪い事を考えながら会社を運営することにしたということです。この運営ならば、誰にでも受け入れられて信用も増すと考えたからです。ところが、彼は次第に損得勘定や善惡以外に人の判断や行動を左右しているものがあることに気づきます。それは、「利己の心」です。自分の都合を優先したり、自分を良く見せようとしている「利己の心」が時には損得勘定や善意よりも優先されてしまうことに気づき、人間として正しいことを考えるだけでは十分ではないと考えて、「利他の心」を説くようになったそうです。「利他の心」それは、「他によかれかし」と考えることです。善い事をするとともに、他人のためになることをするということを経営の理念に据えました。他人から「してもらう立場」から、自ら率先して「してあげる立場」にたってこそ、周囲に役に立つ人へ成長することができるはずであると考えたわけです。より良い仕事をしていくためには、自分だけのことを考えて判断するのではなく、まわりの人のことを考え、思いやりにみちた「利他の心」に立って判断すべきであるとしたわけです。この考えは、生徒の皆さんにとっても、日々の成長の大きな糧（かて）となるものだと思います。周りの人たちへの思いやりが素晴らしい学校づくりへつながっていくはずです。

